

令和4年度 **国語** (50分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけない。
- 2 この問題冊子は31ページである。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始の合図前に、監督者の指示に従って、解答用紙の該当欄に以下の内容をそれぞれ正しく記入し、マークすること。
 - ・①氏名欄
氏名を記入すること。
 - ・②受験番号、③生年月日、④受験地欄
受験番号、生年月日を記入し、さらにマーク欄に受験番号(数字)、生年月日(年号・数字)、受験地をマークすること。
- 4 受験番号、生年月日、受験地が正しくマークされていない場合は、採点できないことがある。
- 5 解答は、解答用紙の解答欄にマークすること。例えば、

10

と表示のある解答番号に対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号10の解答欄の②にマークすること。

(例)

解答 番号	解 答 欄				
10	①	②	③	④	⑤

- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけない。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってよい。

国語

解答番号

1

）

22

1

次の問1～問5に答えよ。

問1 傍線部の漢字の正しい読みを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 1。

彼は私の宿命のライバルだ。

- | | | | | |
|-----|------|-------|-------|-------|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| すくせ | すくれい | しゅくれい | しゅくめい | しゅくせい |

問2

(ア)、(イ)の傍線部に当たる漢字と同じ漢字を用いるものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は

2

・

3

。

(ア) 今年はヒヤクの年になるだろう。

2

- ① ヤクドウ感あふれる振付け。
② 外交面でタイヤクを果たす。
③ ケイヤク書に目を通す。
④ ヤクガク部に進学する。
⑤ ホンヤクされた作品を読む。

(イ) キノウホウによる科学研究。

3

- ① 親子でノウギョウを営む。
② ズノウの働きを活性化させる。
③ 店にノウヒンする。
④ 疑いがノウコウである。
⑤ ノウドウテキな態度で臨む。

問3

空欄

に入る語として最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

4

。

私の担当業務は多岐に

。

①

重なる

②

合致する

③

収束される

④

終わる

⑤

わたる

問4

「哀歎」と同じ構成の熟語を、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

5

。

①

無用

②

冷淡

③

巧拙

④

避難

⑤

造作

問5

傍線部A～Eについて、敬語の使い方が適当でないものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

6

。

本日は、御来店くださり、まことにありがとうございます。当店はまもなく閉店の時間です。どなたさまも、お買い忘れないよう、よろしくお願ひ申し上げます。お帰りになる際は、開いているドアを御利用してください。なお、明日は、朝8時より営業をいたします。

- ⑤ ④ ③ ② ①
E D C B A

2

つつじ市の南高校では、七月に海外の提携都市から高校生二十名が来校することになった。次に挙げる【話合いの一部】は、提携都市の高校生との交流会を企画することになった南高校の生徒会役員が行ったものである。これを読んで、問1～問3に答えよ。

【話合いの一部】

柏木さん 「七月に提携都市から高校生が来校するから、生徒会でその高校生との交流会を企画することになったよ。」

塩田さん 「そうなんだ。もっと詳しく教えて。」

柏木さん 「つつじ市が海外の都市と提携して、高校生の交流活動を行っているのは知ってるでしょ？ 生徒会顧問の峰岸先生のお話では、その交流活動の一環で、高校生二十名が来日してつつじ市に四日間滞在するんだって。」

前園さん 「あ、それ、知ってる。つつじ市主催の『つつじプログラム』でしょ？ たしか去年は東高校に、プログラムに参加した海外の高校生が来てたよね？」

柏木さん 「そうそう、それ。」^A『つつじプログラム』で来日した高校生は、つつじ市を観光する中で、地元の人たちと交流をしたり日本の文化を学んだりするんだけど、七月十五日には終日南高校での授業に参加するんだって。ちなみに、^B前園さんが言っていたように、去年、その高校生たちの受け入れをしたのが、東高校なんだ。というわけで、七月十五日の放課後に行う提携都市の高校生との交流会を生徒会で企画することになったんだ。それで今日はその交流会の内容をみんなで決めるために集まってもらったんだよ。」

塩田さん 「なるほど。じゃあ、茶道部に頼んでお茶会をしたらいいんじゃない？ または、合唱部に頼んで日本の歌を歌ってもらうのもよさそうだね。」

横山さん ^C「一緒にスポーツをするのどう？ みんなで盛りあがれると思うよ。」

井川さん 「ちょっと待って。まずは、今年の『つつじプログラム』の内容を踏まえた上で、交流会の内容を考えた方がいいんじゃない？」^D 交流会の内容と『つつじプログラム』の他の内容が重複したら、おもしろくないと思うんだよね。」

前園さん 「それもそうだね。柏木さん、峰岸先生から何か詳しいことを聞いてない？」

柏木さん 「それなら、峰岸先生から聞いてきた話をまとめたメモがあるから、ちょっと待ってね。……ええと、メモによると、^E今年の『つつじプログラム』では、滞在一日目は市内観光。具体的には観光農園に行ったり、お寺に行ったりするんだって。二日目は、つつじ市立緑中

学校の遠足に合流して高原でのハイキング。三日目は、南高校での授業体験。四日目は、午前中につつじ市公民館の茶室で日本文化体験。ここで茶道の体験をするんだって。そして午後は自由行動らしいよ。」

塩田さん 「楽しそうだね。そういうことなら、南高校での交流会は茶道部に依頼しなくてもいいかもしれないね。」

横山さん 「そうか。ハイキングもあるなら、スポーツじゃなくてもよさそうだね。」

井川さん 「あのさ、ちょっと提案があるんだけど、いい？ 交流会の内容については、いろんな意見があると思うんだけど、その前に、企画内容を考えるための前提をみんなで確認しない？ その方が、話がまとまりやすくなると思うんだよね。」

柏木さん 「たしかに、その方が話はまとまりやすいね。井川さん、何かアイデアはあるの？」

井川さん 「一緒に活動できることを前提にして、企画を考えるのはどう？ 一緒に活動できたら、お互いに楽しいと思うんだ。」

前園さん 「それ、いいね。」

塩田さん 「うん。そうだね。」

柏木さん 「じゃあ、今まで出てきた意見も含めて整理すると、交流会の企画にあたっての前提は、『つつじプログラム』の他の内容と重複しないことと、一緒に活動できること。この二点でいいかな？」

塩田さん 「うん。いいよ。」

横山さん 「そう考えると、合唱部に日本の歌を歌ってもらうのもふさわしくはないね。……たとえば、クッキング部に頼んで、日本らしい料理をみんなと一緒に作るのはどう？ これなら、『つつじプログラム』の他の内容と重複しないし、一緒に活動もできるんじゃないかな？」

前園さん 「いいね。」

塩田さん 「賛成。」

柏木さん 「じゃあ、来週にクッキング部の部長を交えて詳細について話し合おう。」

問1

傍線部F そういうことなら、……いいかもしれないね。とあるが、この発言は、傍線部A～Eのどの発言を踏まえたものか。その組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

7

① AとB

② AとD

③ BとC

④ CとE

⑤ DとE

問2

8

。

この話合いについて正しく説明したものはどれか。その組合せとして最も適当なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

ア 柏木さんは、話合いに必要な情報を提示したり、提案された意見を整理したりしていた。

イ 塩田さんは、話合いが横道にそれていくたびに、元に戻そうとしていた。

ウ 横山さんは、内容を掘り下げる質問を繰り返し、話合いを深めようとしていた。

エ 前園さんは、たくさん新しいアイデアを出し、話合いを円滑に進めようとしていた。

オ 井川さんは、意見やアイデアを出す際にその理由も述べていた。

① アとエ

② アとオ

③ イとウ

④ イとオ

⑤ ウとエ

問3 この話合いの目的は何であったと考えられるか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

9

。

- ① 交流会の内容についての合意を形成すること。
- ② 交流会についての各自の感想を交換すること。
- ③ 交流会についての意見を各自が発表すること。
- ④ 交流会についての疑問を各自が提示すること。
- ⑤ 交流会を企画する前提について確認すること。

3

西高校では、「総合的な探究の時間」に「環境」をテーマにした探究活動を行っている。この探究活動で「海洋プラスチックごみ」について調べた田中さんは、その結果を次の【レポート】と【ポスター】（レポートで伝えたいことを一枚の用紙にまとめたもの）にまとめた。これらを読んで、問に答えよ。

【レポート】

「海洋プラスチックごみ」について

1年2組 田中薫

プラスチックを生産する際には、エネルギー利用によってCO₂が排出されます。また、焼却の際にもCO₂が排出されます。このことが気候変動の一因になったり、生態系に影響を与えたりします。1950年以降に生産されたプラスチックは、83億トンを超えています。プラスチックの廃棄量も増えていて、現在のペースで廃棄され続けると、2050年までに250億トンのプラスチックが廃棄されると予測されています(図1-3-1)。また、プラスチックの生産割合を見ると、包装が最も多く、全体の36%を占めています(図1-3-2)。

特に私が問題だと感じているのは、海に流出した「海洋プラスチックごみ」です。死んだ海鳥の胃の中から、誤って食べたプラスチックが多く見つかったり、魚の胃から細かいプラスチックが発見されたりしています。写真1-3-1にあげるのは、「海洋プラスチックごみ」が絡まっているウミガメです。私はこのウミガメの写真を見たことがきっかけで、この問題に関心をもつようになりました。「海洋プラスチックごみ」は解決すべき問題だと思います。

プラスチックの包装はたしかに便利ですが、それを廃棄すると、地球環境に負荷を与えます。しかも、その負荷を与えた結果は、その地域ですぐに顕在化するとは限らず、遠く離れた地で現れたり、環境負荷の蓄積等により一定の時間が経過してから表面化したりする可能性があります。だから私たちは環境への影響を忘れずに生活してはならないと思います。

(写真と資料は環境省「令和2年版 環境・循環型社会・生物多様性白書(PDF版)」から引用)

図1-3-1 プラスチック廃棄物発生量の推計

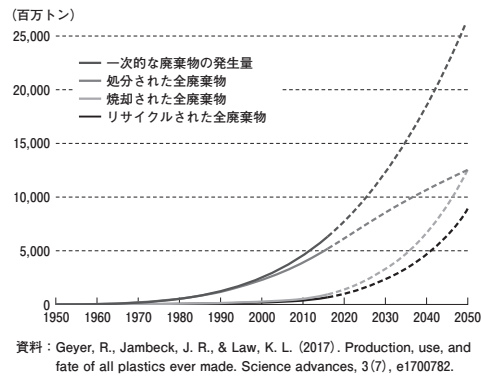


図1-3-2 2015年の産業分野別の世界のプラスチックの生産割合

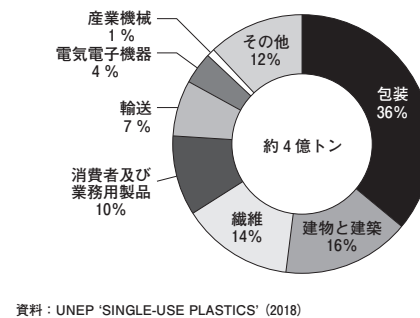
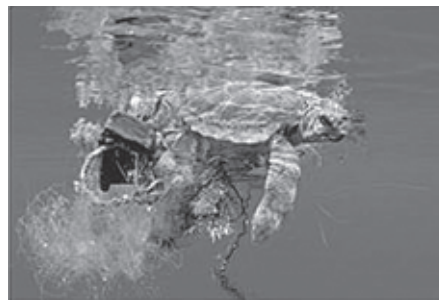


写真1-3-1 海洋プラスチックごみが絡まっているウミガメ

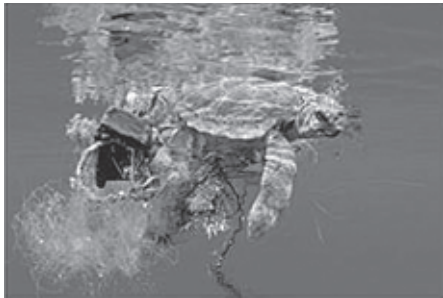


資料：BIOSPOTO/時事通信フォト

「海洋プラスチックごみ」について

1 年 2 組 田中薫

写真 1-3-1 海洋プラスチックごみが絡まっているウミガメ



資料：BIOSPHOTO/時事通信フォト

問題だと感じること

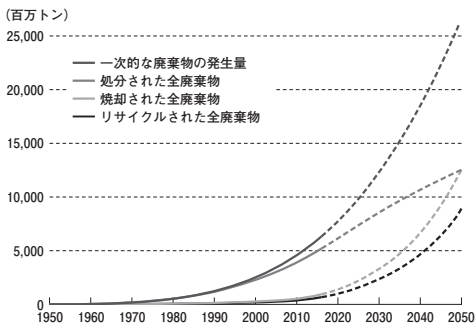
海に流出した「海洋プラスチックごみ」が、写真のように、海の生物に影響を与えている。他にも、次のような報告がある。

- ・死んだ海鳥の胃の中から誤って食べたプラスチックが見つかった。
- ・魚の胃から細かいプラスチックが見つかった。

プラスチック廃棄物発生量

2050 年までに 250 億トンのプラスチックが廃棄されると予測されている。

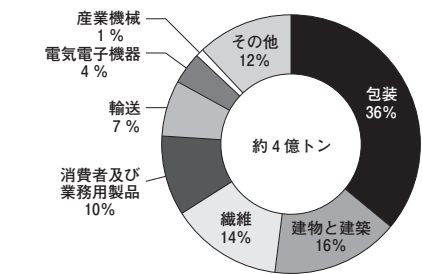
図 1-3-1 プラスチック廃棄物発生量の推計



世界のプラスチックの生産割合

包装が最も多く、全体の 36% を占めている。

図 1-3-2 2015 年の産業分野別の世界のプラスチックの生産割合



意見

私たちは毎日の生活の中で環境に負荷を与えている。しかも、負荷を与えた結果は、その地域ですぐに顕在化するとは限らず、遠く離れた地で現れたり、環境負荷の蓄積等により一定の時間が経過してから表面化したりする可能性がある。だから、私たちは環境への影響を忘れずに生活しなくてはならない。

(写真と資料は環境省「令和 2 年版 環境・循環型社会・生物多様性白書(PDF 版)」から引用)

問 田中さんは【レポート】の内容を【ポスター】にまとめる際に、Ⅰ【構成】、Ⅱ【ポスター紙面の作り方】、Ⅲ【資料(写真やグラフ)の扱い方】において、どのような工夫をしたと考えられるか。最も適当なものの組合せを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

Ⅰ【構成】

A 【レポート】では、「主張」―「問題意識」―「説明」という流れで構成していたが、【ポスター】では、「問題意識」―「説明」―「主張」という構成に変更することで、伝えたいことを読み手が把握しやすくなるようにした。

B 【レポート】では、「説明」―「問題意識」―「主張」という流れで構成していたが、【ポスター】では、「問題意識」―「説明」―「主張」という構成に変更することで、伝えたいことを読み手が把握しやすくなるようにした。

C 【レポート】の「問題意識」―「説明」―「主張」という構成を【ポスター】でもそのまま生かすことで、伝えたいことを読み手が把握しやすくなるようにした。

Ⅱ【ポスター紙面の作り方】

A 資料(写真やグラフ)の引用を増やすことで、読み手の興味を引きつけるようにした。

B 強調したい客観的事実に全て下線を付すことで、重要な箇所が一目で読み手に分かるようにした。

C 項目を明示したり箇条書きを用いたりすることで、読み手が内容を理解しやすくなるようにした。

Ⅲ【資料(写真やグラフ)の扱い方】

A 「写真」は、【レポート】では「海洋プラスチックごみ」に関心をもつきっかけになったものとして配置したが、【ポスター】では問題点を明示するものとして配置した。

B 「グラフ」は、【レポート】では「海洋プラスチックごみ」の背景について説明する資料として二つとも同等に扱っていたが、【ポスター】では一方を強調するために上部に配置した。

C 「写真」は、【レポート】では問題点を明示するものとして配置したが、【ポスター】では「海洋プラスチックごみ」に関心をもつきっかけになったものとして配置した。

⑤	④	③	②	①
I	I	I	I	I
C	B	B	A	A
•	•	•	•	•
II	II	II	II	II
B	C	B	C	A
•	•	•	•	•
III	III	III	III	III
C	A	C	B	A

4

次の文章を読んで、問1～問6に答えよ。

メール画面にアクセスすると、早くもOB訪問をしたいと電話連絡をよこしてきた大学生からのメールが届いていた。メールの件名が「おはようございます」となっている。何だそのタイトル、と思いつつ、その不慣れた文章に頬が緩む。

就活は、大変だった。

俺が就活生だったころは、氷河期と呼ばれていた時代よりは回復傾向にあると言われていたものの、やはり何十社もの試験に落ちた。ゲーム業界をはじめとするエンタテインメント関係の会社目的を絞っていたことも、なかなか内定が出なかった原因の一つかもしれない。結局内定をもらえたのは、ゲームセンター向け景品やプリントシール機の開発をメイン事業に据えつつ、最近では家庭用ゲームやスマホ用ゲームの開発にも力を入れているこの会社だけだった。

入社してすぐ、川辺は経理部へ、俺はデジタルコンテンツ事業部へ配属された。そのころ、川辺はしきりに飲もう飲もうと俺を誘ってきた。想像していたものとはかけ離れた業務内容に対する愚痴を、気心の知れた同期に向けて発散したかったのだと思う。ただ、社として特に力を入れているフィールドということもあり、デジタルコンテンツ事業部は忙しかった。スマホ用ゲームを取り巻く環境は一日単位で変わっていく。俺は、川辺の誘いを断る回数が増えていった。

入社して二年が過ぎ、いよいよ自ら企画したゲームの開発に携われそうだというとき、辞令が出た。俺は総務部へ、川辺はデジタルコンテンツ事業部への異動だった。それから二年間、二人とも、異動はない。

チャイムが鳴る。九時。始業の合図だ。

「あ、あと」

清水課長がこちらを見る。

「整理作業月間の作業も、進めておいてね」

今年度も、総務部への新人の配属はなかった。隣にいる清水課長も、ずっと奥の席に座っている村西部長も、二度目の異動で総務部に流れ着き、そのまま十年以上、総務部から出ていないらしい。このままいくと、俺は本当に、ここから見える人たちと同じように席を移動していく会社員人生を送るのかもしれない。

就活生からのメールは、ゲーム業界で働くことへの夢と希望に満ち満ちている。ご丁寧に、OB訪問当日でしたい質問案まで貼り付けられている。

俺はそれを見ながら、自分が就活生だった時にOB訪問をした相手は、【一日のスケジュールを教えてください】というあまりにもよくある質問に、本^A当に正直に答えていたのだろうかと思った。あの人たちは、俺の夢を、いや、就活生だったころの自分の夢を守るために、ウソをついてくれていたのではないだろうか。

「小出課長、今少しよろしいですか」

電話の受話器を置いた小出課長に、俺は声をかける。

「この掲出書類のことなんですけど」

俺が言い終わらないうちに、小出課長は口を尖^{とが}らせた。

「あれ、これ昨日渡したやつじゃん。まだ回覧してくれてないの？」

なるべく早く、と書かれている付箋の黄色が、ライトに照らされてぴかりと輝く。

「いえ、回覧はしたんですけど差し戻しがありまして、こちらなんですけど」俺は、「領収書」の箇所を指しながら続ける。「社内規程では、『領収証』表記なんです。ですが、いただいたものと『領収書』になっているんです。こちら、意味があつてわざと変えたのか、ただのタイプミスなのか確認できればと」

「え？」

小出課長より早く、その両側のデスクにいる人が噴き出した。「すげえ細かい」笑い声の中に、そんなつぶやきが混ざっている。

「大変だね、君も」

B
小出課長の目に、少し、同情の色が滲^{にじ}んだ気がした。

「別に意味はないから、そちらの都合のいいように変えてもらっていいよ」

「では書面のデータはこちらで修正しておきますので、こちらに二重線と訂正印を……」

「はいはい」

小出課長は笑いながら、あつという間にボールペンで二重線を引いた。「あ」俺は思わず声を漏らす。訂正の二重線を引くときは必ず定規を使うよう、清水課長から再三言われているのだ。小出課長は俺の声など全く気にも留めていないようで、二重線の上から訂正印を押した。

これでやっと、回覧できる。俺は小出課長に頭を下げ、早足でデスクへと戻る。

清水課長はよく、社内で笑われている。さっき、小出課長の両側の人たちがそうしていたように。

ふと、壁かけ時計を見る。まだ十時にもなっていない。異動してから、時間の流れの速度は明らかに変わった。このままじっと時計を見つめていれば、10、という数字のマルの部分が、黒く塗りつぶされていくような気がした。

デジタルコンテンツ事業部にいたころは、業務をこなすうえでとにかくスピードが大事だった。書類上、全角と半角が揃っていない箇所があったとしても、規定と表記が違う箇所があったとしても、それを直すことにより業務に遅れが生じるならば、資料に目を通す人間の理解力を信頼した。

朝、川辺が抱えていたFAX。こちらにべろんと顔を出していた、ある一枚。書き損じの部分が、ぐしゃぐしゃと丸く塗りつぶされていた。いくら寝不足でも、会社に寝泊まりすることになったとしても、あのころの煩雑さが今は愛しい。

昼食後、すぐに手帳を^{ひら}げるのは、To Doリストが^{あふ}れ返っていたデジタルコンテンツ事業部時代からの癖だ。今は、手帳がなくとも^{そら}語^{こと}じることが出来るほどしか書き込みがない。

【整理作業月間 箱の洗い出し作業】

二十八日の欄に、そう走り書きされている。今日は二十一日だが、二十八日までに土日挟むので、そろそろ手をつけておいたほうがいいだろう。社内で保管しきれなくなった紙資料については、種類ごとにダンボール箱にまとめ、倉庫業者に保管作業を委託している。そして、箱を倉庫に入れる際は、箱一つにつき一枚、内容リストというものを総務部に提出してもらうことになっている。各部門から提出される内容リストには、それぞれの箱の中身や作成者の氏名、保管期限などの情報が記載されている。

紙資料の保管年限は、種類や重要度によって異なる。一年間保管したあと廃棄してしまってもいいものもあれば、永久保管と設定されているものもある。ただ、最近はどうも重要な紙資料であっても、最初から永久保管と設定することは少ない。とりあえず十年保管に設定しておき、十年ごとに廃棄か延長かを確認することで、無駄な倉庫代を削減しようという動きがあるからだ。箱の数を基に倉庫代が算定されるため、会社としては、倉庫に保管している箱は一つでも少ない方がいい。

俺は、落ちていく^{まぶた}瞼をどうにかこじ開けながら、総務部が所有している内容リストの中から、保管期限が【2015年6月】となっているものを抽出していく。他の部に比べたら紙資料そのものの量は少ないが、内容の古さはトップクラスかもしれない。いくら職制変更があったとしても、総務部だけは必ず会社にありつづける。定期的に保管期限を延長しつつ残されている紙資料が、今でもたくさんあるのだ。

抽出した内容リストを見ると、作成者名の欄には、村西という判が押されており、作成日の欄には今から二十年も前の日付が書かれている。二十年前の村西部長が作成した箱、ということだ。つまり、はじめに設定した十年という保管期限を一度、延長しているのだろう。案の定【2015年6月】

の下にある【2005年6月】という文字には二重線が引かれている。そして二重線の上に押されている訂正印の名前を見て、俺は一瞬、眠気が覚めた気がした。

【清水】

俺はちらりと、隣の席を見る。トイレにでも行っているのか、そこにはからっぽの椅子があるだけだ。

十年前、清水課長は、おそらく俺が座っているこの席、総務部の下っ端が座るこの席で、同じような作業をしていたのだ。最も肉体的に無理が利くであろう若い男の体が、社内の誰も興味を示さない『整理作業月間』の業務を肅々とこなしていたのだ。

三十枚近くある内容リストを手に、俺は立ち上がる。

「部長、いま少しよろしいですか」

デスクのすぐそばに立つ俺を見て、村西部長がペンを置く。

「倉庫に預けている資料の整理作業を行っているのですが、こちらが来月保管期限を迎える箱の内容リストになります。週明けまでに確認いただいて、期限延長か廃棄か判断いただければありがたいのですが」

村西部長が、内容リストを扇のように拡げる。どの紙の保管期限記入欄にも、定規で引かれた二重線と、清水課長の訂正印が押されている。

一枚、一枚、すべてに、丁寧に。

「懐かしいな、これ」

村西部長が、ふ、と破顔した。

「かなり前のやつだろ、これ」

「……箱自体は二十年前に作成されたようですね。十年前に一度、保管期限を延長しているようなので」

俺がそう付け加えると、村西部長は「そうそう」とさらに表情を緩ませる。

「十年前、期限延長するって言ったたら、もとの保管期限をぐしゃぐしゃって塗りつぶしたんだよ」あいつが、と、村西部長が清水課長のデスクを見やる。

「それで俺が、どんな些末な修正でもきちんとしなきゃダメだって怒ったんだ」

E
え、と漏れそうになった声を、俺は飲み込む。

「そしたらあいつ、わざわざ一回修正液で全部消して、その上からもとの保管期限を書き直して、二重線引いて訂正印押して……ほら、ここだけ色がちよっと違うだろ」

言われてみれば確かに、【2015年6月】と書かれているあたりは、他の部分と比べて白色がより鮮やかに見える。

「修正液なんてビジネス文書としてもっと不適切だってまた怒ってな。あのときは清水も総務に来たばかりだったから」書き損じを塗りつぶす。修正液を使用する。今の清水課長の几帳面さからは、考えられない。

「今、社会人として基本的なことを教えてくれる人ってなかなかいないだろう。どの部署も即戦力即戦力って……基本があってこそその即戦力だろうに」まあそういう業界だから仕方ないかもしれないが、と、部長は一度、咳をする。

「その点、岡本はしっかりしてるな。考えてみたら、総務部に来てからそういう基本的なことで注意したこと、一度もない」

それは、村西部長に書類が回覧される前に、清水課長がすべてチェックしてくれていたからだ。全角と半角のズレや、規程との表記の違いに至るまで。

「いい上司に恵まれたんだな、きつと」

部長のデスクの内線が鳴る。「あ、これ全部、また十年延長しといて」電話の受話器を掴んだ部長に礼をして、俺は自分のデスクに戻ろうと振り返る。

清水課長が、戻ってきている。

痔防止なのか、ドーナツ型のクッションの上に大きな尻を置いている。社内の誰かに笑われてしまうほどの几帳面さで、相変わらず社内規程を開いてうんうん唸っている。

俺は、二十年前に作られた内容リストをデスクに拡げた。そして、十年前の清水課長もきつとそうしたように、ノックしたボールペンの先を、定規に沿ってすうと滑らせた。

（朝井リョウ「清水課長の二重線」による。）

問1

傍線部A 本当に正直に答えていたのだろうかと思った とあるが、ここでの「俺」の思いを説明したものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 11。

- ① OB訪問の相手は、長年同じ部署から出ることができない自分の境遇に対して不服に思っではいても、それを隠して希望の部署で働ける会社であることを伝えていたのではないかと思ったということ。
- ② OB訪問の相手は、「俺」がすでに何十社も試験に落ちていることを、自身が就活生だったときの状況と重ねて、最後まで就活を頑張っしてほしいと励ましていたのではないかと思ったということ。
- ③ OB訪問の相手が、ゲーム業界への就職を目指す「俺」に入社してほしいと思うあまり、働き方の実態の説明を避けて、就活生が理想とする働き方に合わせて語っていたのではないかと思ったということ。
- ④ OB訪問の相手は、毎日業務に追われているため、ありきたりな質問ばかりする「俺」に対して不満を抱き、業務実態とは異なるいい加減な回答しかしてくれなかったのではないかと思ったということ。
- ⑤ OB訪問の相手が、「俺」と同様に仕事に不満を持っていた可能性に思い至り、就活生の理想像や自身のかつての夢を守るために、あえて充実した仕事内容を語っていたのではないかと思ったということ。

問2

傍線部B 小出課長の目に、少し、同情の色が滲んだ気がした。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

12。

- ① 社内規程の遵守に厳しい総務部のやり方が、他部署の人に軽く扱われたり、笑いの対象となったりする状況であることを、小出課長が少しばかり気の毒に思っているように感じられたということ。
- ② 小出課長の両側のデスクの人が噴き出したことで、小出課長自身が書類の不備についていたたまれない気持ちになったが、同情することでごまかそうとしているように感じられたということ。
- ③ 書類を早く回覧してくれるように付箋で指示をしたにも関わらず、まだ回覧をしていなかったことについて不満に思うだけでなく、「俺」の手際の悪さを痛々しく思っているように感じられたということ。
- ④ 総務部も業務過多なのに、簡単に訂正できることを確認しなければならない状況は気の毒であり、定規を使用して二重線を引かなければならないことをかわいそうに思っているように感じられたということ。
- ⑤ 小出課長は、「俺」がこのような確認に来るのは清水課長の書類不備の後始末をしなければならぬからだという事に気づき、そのことを不憫に思っているように感じられたということ。

問3 傍線部C あこのころの煩雑さが今は愛しい とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

13。

- ① 時計を見たときに、総務部とデジタルコンテンツ事業部での時間の流れの速度に差があることに気づき、とりとめもなく考えをめぐらすことになったから。
- ② 会社に寝泊まりするほど仕事に情熱を傾けている川辺を見て、デジタルコンテンツ事業部の複雑で専門性が高い業務をもう一度担おうと決意したから。
- ③ 総務部での業務に比べると、デジタルコンテンツ事業部での業務はスピードを求められて忙しかったが、その分充実感があつたことを思い出したから。
- ④ かつてデジタルコンテンツ事業部でいかに複雑で膨大な仕事をしていたかに気づき、二度とそういうところに戻りたくないという思いを改めて抱いたから。
- ⑤ 寝不足になりながらも業務に追われていたデジタルコンテンツ事業部での仕事を乗り越えた自分自身を、褒めたたえたい気持ちになったから。

問4 傍線部D 俺は一瞬、眠気が覚めた気がした とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は

14。

- ① 総務部の役割とはいえ、清水課長がまだ若かったころに整理した書類が機械的に保管期限を延長されて、今でも倉庫の片隅にそのまま廃棄されもせず残っていたことに憤慨したから。
- ② 一枚ずつ端正に二重線を引いて訂正印を押した昔の清水課長の内容リストを見て、若いときから全く同じ姿勢で仕事を繰り返してきたのだという事実に関自分の将来がふと思ひ浮かんだから。
- ③ ほとんどの人が興味を示さない資料の整理という地味な仕事でも、細部にまで決して手を抜かない清水課長の、今とは違う積極的な姿勢がうかがわれるように思われたから。
- ④ 単純な作業に不満を持っていたが、かつて清水課長が、そのときの彼の若さには不似合いとも言える地味な仕事を黙々とこなしていた事実を突きつけられたように感じたから。
- ⑤ なかなか他の部署に異動できない総務部で、肉体的に負担の大きい整理作業を、若い男ということで任せられていたかつての清水課長に思わず同情心を抱いたから。

問5 傍線部E え、と漏れそうになった声 とあるが、このときの主人公の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 一つ一つの業務を確実にを行うよう「俺」の仕事ぶりをチェックしてくれる理想的な上司だと思っていた清水課長が、過去の粗雑な仕事を隠していたことに失望し、言葉を失っている。
- ② 現在の基本に忠実で真面目な清水課長の仕事ぶりに比べ、かつては自らの誤りを隠してごまかすような訂正をした一件があったことを知って、予想外の事実面に面食らっている。
- ③ 総務部に異動してから基本的なことを教えてもらい、几帳面な性格だと感じていた清水課長が、最初は怒られるような訂正の仕方をしていたことに驚き、意外だと思っている。
- ④ 過去の粗雑な仕事ぶりに比べ、現在は人に笑われるほどの生真面目さで仕事に取り組む清水課長の変貌ぶりに、働くことはその人の人格まで変えてしまうものかと恐怖を感じている。
- ⑤ 真面目で基本に忠実な仕事ぶりに共通点のある村西部長と清水課長の間に、かつては仕事のやり方をめぐって争うようなことがあったのかと信じられない気持ちを抱いている。

問6 この文章の内容と表現の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 清水課長の人間像について語り手が直接説明するのではなく、他の登場人物たちに語らせることで、個性的な課長と「俺」の仕事に対する意識の違いが徐々に浮かび上がってくるように描かれている。
- ② 全体を通して清水課長への「俺」の認識の変化が、社会人としての考え方の深まりに結びつくような構成をとっており、社会人として前向きに業務を行っていくとする「俺」の成長が描かれている。
- ③ 前半での緊迫感のある総務部内の描写が後半では擬態語の多用などにより落ち着いたものとなり、その対比が社会人として成長し、ゆとりを持って仕事に向き合う「俺」の様子と重なり合うように描かれている。
- ④ 若者らしい言葉遣いが減り、社会人らしい表現が徐々に増えていくことで、「俺」が組織の歯車になることを目的とした清水課長の指導から脱し、臨機応変な対応ができる社会人として自立していく過程が描かれている。
- ⑤ 「俺」と清水課長自身の入社当初の回想を交互に挿入するなど、いくつかの時間軸を作品中に持たせる構成をとり、二人の入社当時から現在に至る仕事への意識の変化が並行して描かれている。

5

次のⅠ・Ⅱの文章を読んで、問1～問6に答えよ。

Ⅰ

俊恵^(注1)に和歌の師弟の契り結び侍りし初めの言葉にいはく、「歌は極めたる故実の侍るなり。われをまことに師と頼まれば、このこと違へらるな。そ

こはかならず末の世の歌仙にいますかるべき上に、かやうに契りをなさるれば申し侍るなり。あなかしこあなかしこ、われ人に許さるるほどになり

たりとも、証得して、われは気色^(注2)したる歌詠み給ふな。ゆめゆめあるまじきことなり。後徳大寺^(注3)の大臣は左右なき手だりにていませしかど、その故実

なくて、今は詠みくち後手^(注4)になり給へり。そのかみ前の大納言など聞こえし時、道を執し、人を恥ぢて、磨き立てたりし時のままならば、今は肩並ぶ

人少なからまし。われ至りにたりとて、この頃詠まるる歌は、少しも思ひ入れず、やや心づきな言葉うち混ぜたれば、何によりてかは秀歌も出で来

む。秀逸なければまた人用ゐず。歌は当座^(注5)にこそ、人がらによりて良くも悪しくも聞こゆれど、後朝^(注6)に今一度静かに見たるたびは、さはいへども、風

情もこもり、姿もすなほなる歌こそ見とほしは侍れ。かく聞こゆるはをこのためしなれど、俊恵はこの頃もただ初心の頃のごとく歌を案じ侍り。ま

た、わが心をば次にして、あやしけれど、人の讃めも誇り^(注7)もするを用ゐ侍るなり。これは古き人の教へ侍りしことなり。このことを保てるしるしに

や、さすがに老いはてたれど、俊恵を詠みくちならずと申す人はなきぞかし。また異事^(注8)にあらず、この故実を誤たぬゆゑなり。」

(『無名抄』による。)

(注1) 俊恵——平安時代の歌人。『無名抄』を書いた鴨長明の和歌の師。

(注2) 歌仙——歌の名人。

(注3) 後徳大寺の大臣——俊恵と同時代の歌人である藤原実定。

(注4) 心づきな言葉——感心しない言葉。

(注5) 当座——その場。

(注6) 後朝——その翌朝。

(注7) 見とほしは侍れ——いつまでも見続けられるものです。

(注8) をこのためしなれど——ばかげた例だが。おこがましいが。

(注9) あやしけれど——不審であっても。

II

或^{ある}曰^{ヒト}、「著書^ハ之人^{（注10）}、博覽多聞、學問習熟^{スレバ}、則能推^{すなはチ}類興^レ文^{（注11）}。文由^ハ外而興^{（注12）}、未^ダ必^{ズシモ}実才^{（注12）}与^ト文相副^{（注13）}也。且^ツ濺^{そそ}意^{（注13）}於華葉^{くわえふ}之言^{（注13）}、無^ク根核之深^{（注14）}、不^ズ見^{（注14）}大道^{（注14）}体要^{（注14）}、故^{（注14）}

立^{ツル}功者^{（注15）}希^{まれ}。安危之際、文人不^{あづ}与^{（注16）}、無^ク能建^{ツル}功之^{（注15）}、徒^た能^{（注16）}筆說^{（注16）}之効^{（注16）}也。」

曰^{ハク}、「此不^こ然^{（注17）}。周世著書之人^{（注18）}、皆權謀之臣、漢世直言之士^{（注19）}、皆通覽之吏^{（注20）}。豈^{ナリ}謂^{（注20）}

文非^ハ華葉之生^{（注21）}、根核推^{（注21）}之也。心思^{（注21）}為^{（注21）}謀、集扎^{（注21）}為^{（注21）}文、情見^{（注21）}於辭、意驗^{（注21）}於言^{（注21）}。

（中略）書疏・文義、奮^{（注22）}於肝心、非徒博覽者所能造、習熟者所能為^{（注22）}也。」

（『論衡』による。）

- (注10) 博覧多聞——広く書物を読んで、物事に通じていて、博学であること。
- (注11) 興——作る。
- (注12) 実才——実際に持っている才能。
- (注13) 華葉之言——言葉の修飾。
- (注14) 大道——人のふみおこなうべき立派な道理。
- (注15) 驗——証拠。
- (注16) 筆説之効——文筆の効果。
- (注17) 周——中国古代の王朝名。後にある「漢」も中国の王朝名。
- (注18) 権謀——策略。はかりごと。
- (注19) 直言——気がねせず、思うことをそのままに言う。
- (注20) 通覧——全体にわたって目をとおすこと。
- (注21) 扎——竹の札。
- (注22) 肝心——こころ。

問1 傍線部A このこと

の具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

- ① 歌人として他人に認められるようになったとしても、若いときに師事したことを忘れずに師匠を敬わなければならないということ。
- ② 歌人として他人に認められるようになったとしても、私こそ素晴らしい歌人だと思いがつた様子の歌を詠んではならないということ。
- ③ 歌人として他人に認められるようになったとしても、他人の和歌に対してあれこれと批評することを控えなければならないということ。
- ④ 歌人として若い人たちを指導する立場になったとしても、弟子たちに負けないように絶えず和歌を詠まなければならないということ。
- ⑤ 歌人として若い人たちを指導する立場になったとしたら、名人の境地に達したということを自覚して詠まなければならないということ。

問2 傍線部B 申し侍るなり の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 18。

- ① 将来歌人として有名になる見込みはないが励ましてあげたかったから。
- ② 死期を迎えたので、最後に和歌の師として遺言を残したいと考えたから。
- ③ 将来歌の名人になるために、和歌の師弟関係を結ぶ約束を交わしたから。
- ④ 和歌の師として自分と同じ失敗を弟子にはさせたくないと思ったから。
- ⑤ 将来歌人として有名になる前に師弟関係を結ぶ約束をしたかったから。

問3 傍線部C 俊恵を詠みくちならずと申す人はなきぞかし の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 初めて歌を詠んだ頃のように歌を思案し、自分の意見や考えよりも他人の批評の方を尊重するようにしているから。
- ② 歌の技術を向上させるよりも常に周囲の歌人たちに気を配り、人からの評判を最も気にするようにしているから。
- ③ いつまでも初心者の気持ちを忘れずに後進を指導し、自分が歌を詠むことよりも弟子への指導を重視しているから。
- ④ 年老いても初めて歌を詠んだときの気持ちを大切にし、常に最新の詠歌技術を取り入れようと心がけているから。
- ⑤ 自分の思いを歌にすることを心がけ、他人の助言を取り入れるよりも自分の歌に対する考えを大切にしているから。

問4 傍線部D 故立功者希 の理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 20。

- ① 文人が作った文章は独りよがりな表現が多いうえに、自分の知識を全て詰め込んでしまい物事の要点が伝わりにくいものになるから。
- ② 文人が作った文章は感情的な表現が多く用いられているうえに、美辞麗句が多く用いられるため読者に伝わりにくいものになるから。
- ③ 文人が作った文章はわかりやすい表現を常に心がけるうえに、自分が納得するまで推敲することで読者が理解できるものになるから。
- ④ 文人が作った文章は洗練された表現を用いることが多いうえに、感情をそのまま言葉にっていて読者の理解を得ることができるから。
- ⑤ 文人が作った文章は豊富な知識や経験から類推して作られるうえに、表現や修辞に固執しすぎて物事の要点を把握できていないから。

問5 傍線部E 豈謂文非華葉之生、根核推之也 とあるが、そこから分かる文章や言葉に対する筆者の考え方として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 解答番号は 21。

- ① 花や葉が根から栄養を吸収しなければならぬように、適切な表現を用いるためには、多くの経験が必要だということ。
- ② 花や葉が美しければ美しいほどいいように、文章もこだわった表現を用いると、人を感動させるものになるということ。
- ③ 花や葉が根から生じているように、心の中で思いを巡らせて文章に仕立てると、気持ちが言葉にあらわれるということ。
- ④ 根が花や葉にとって大切なように、常に言葉遣いを研究していると、すぐに優れた文章を作ることができるということ。
- ⑤ 根が花や葉にとって欠かせないものであるように、人が感動する文章を生み出すには、知恵と経験が必要だということ。

問6 国語の授業でⅠ・Ⅱの文章を読み終えた後に話し合いを行った。次の【話し合いの一部】を読んで、空欄 X ・ Y に入るものとして最も適切なものを、後の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 22 。

【話し合いの一部】

水野さん 「それぞれの文章にはどのようなことが書かれていたのかな。」

前田さん 「Ⅰの文章では、後徳大寺の大臣が最初は歌人として優れていたけど、その後は力量が劣ってしまったとあるね。」

井沢さん 「Ⅱの文章では、文人はいざというときに頼りにならないというある人の意見をもう一人の人が否定しているね。」

水野さん 「では、二つの文章の違いをまとめてみよう。」

前田さん 「Ⅰの文章は X について述べられていて、Ⅱの文章は Y について述べられているよね。」

水野さん 「なるほどね。創作するためにはどちらも必要となるよね。」

井沢さん 「やっぱり創作は奥が深いね。」

- ① X 最初から何も教えないのではなく、歌人としての経験の差に配慮して弟子を指導しなければならないという師としての心構え
- Y 初めから名文を書けるわけではないので、花や葉などを観察して写實的に文を書く練習をすべきであるという作家としての態度
- ② X 最初は古い歌で優れた境地のものを真似して詠んでいくが、慣れてきたら独自の境地のみを詠み込むという詠歌する際の心構え
- Y 心を込めただけでは人々を感動させる文章は作成できないので、文の修辞や知識を習得すべきであるという文人としての態度
- ③ X 歌人として世間から評価されるようになって、そのことをひけらかすことなく人の歌に助言しなければならぬとする心構え
- Y 最初から人を感動させる文章を作成するのは難しいので、過去の名文から引用すべきであるという文章を作成する際の態度
- ④ X 歌人として世間から評価されるようになったとしても、初心の頃のような謙虚さを忘れてはいけないという歌人としての心構え
- Y 人を感動させるような文章とは表面的な知識や技術だけではなくて、心を込めなければならないという文章を作成するうえでの態度
- ⑤ X 歌人として世間から評価されるようになったとしても、師の教えを忠実に守って詠歌しなければならないという弟子としての心構え
- Y 人が感動するような名文を作るには心を込めるとともに、修辞などの知識や人生経験も必要になるという文章を作るうえでの態度

